

平家物語 十七

リ 伊5
1460
15





平家物語卷第十七

西園被下院宣事

本三位中納言被渡大路事

三位侍本工右馬先朝特事

并内裏女房見系事

法光上人對面事

自屋島院宣御返事被申事

自公家去瀬依許被仰事

本三位中將内東下向事

維威高野熊野齋齋同被授身事

池大訖言開東下向事

三月平氏事

新帝御即位事

依之本三郎盤繩藤戸渡事

賴朝條々養國事

西國文十箇河柳

平氏也源也水十人

二月十日日不之役中約志けひつてとる事と
あしとすよ下万人これとる事あるは見
りゆひひもやあられけ人を入道殿中二位
殿中もあゆえれ子あくおとせし一一家のみ
速とともき人よおとされ給ひしもの院へ
と同一とゆひり給ひ給ひ六あひつたもつ死
とこらとと死しとて城かまふそまらりき
らおしき事則といひと死給ひて人よあ

これ終ひ一のどぢんと成りながら一の
妙法は見のしつひもやとる戸のひも
はもそまらこして死人を忘りんのえのせけ
さこ風のりうはれお月せとけつゆして故中
れ見これ中納言のなるこの八条あり川
ろつうよとくちけひうとあこころはさ
の次良うねひうあうとやして長柄と
とくらん地れひこたれよこよはおれえ

らうさう死人のありのりいせて
之後中をうのこしつこれひつれよ神りぬ
これ二小神う終へて死人う忘り心の終り
まけハ赤衣よとやくととされうりじし
わくハお母えうとこころあつたまは先いと
あてめうふとむよあ人教さいまんの心花もわく
やあらしんとおえあし見えおもられ
わんせんれまじり條くおやあうくむせん

まなぶらり月増とらりと移し遊し入るま
つらむいこく遊し遊し遊し
ありまはまはひらやそれまはまはか
よ海よりなりてくはこしきものまに
とそえとあはたあしとそあ母えくそ又
まよしこひんじよたふりあまの母し母あて
くはし二後入あまふまむじんとそま
りひとらんまのやれまのあまけとかくん
に

ものあましとそあ母くそくそまはれらう
まの神代まもつこくそあ人皇れま
しとら海くしとそあまはれしあ
まれちまはまはまはまはまはまはまは
らあまし海しとそあまはくしきくそん
よハなししとらり入るまはあまし
あまえくそくそりなまあ母せ下るし
かこしとあくまはまはまはまはまは

いあてりんて角しこれのうきりしれきう
まけらよとくしはらしすしきりし
まゆけまけ國をまけひられらうまらう
てんの家人がりるいあれ人といつれまら
あしけえは仲將をこたわらまら見えり
し人れまのあれあれらうけまらひて見
りえあけと波のこらうしはゆ事とまら
やうと苑人のまけしはまらぬし赤衣れ

神とまゆしはまら十六日まけ平のほい
名えりんのまらまけまら院せんまらいん
まら國くまら波院まら

一人聖帝出北國九禁之臺而遷幸九州三
種神器於南海西海之境而經御數年事尤
朝家之御歎又亡國之基也彼重瀛御者燒
失東大寺送信也似賴朝申請之旨雖須被
以死罪獨別親類已為之膚戀龍鳥雲之恩

遙浮万里之南海矣。鴻雁存之情定。通
于九重之途中。欽此。則奉詔入三種之
神器者。可被寬宥。彼卿也。院宣如斯。仍
執達如件。

元暦元年二月十日

大膳大夫大江兼忠

奉

平大納言殿へ。是の如く。礼より。奉侍。三位中納
言。内大臣。あひよ。平大納言。これより。院。せん。の
まも。し。此。より。二。位。後。一。ハ。此。女。こ。ま。く

と。初。ま。そ。の。ま。も。し。は。つ。り。ま。よ。一。と。位。現。せん。と。初。が
これ。より。あ。い。一。前。此。事。と。大。臣。殿。一。よ。ま。り。以
て。世。終。く。これ。より。は。世。終。け。ん。ん。よ。入。局。一
二。と。お。母。え。う。す。あ。ま。と。あり。ま。も。し。方。大。納
言。典。侍。殿。一。と。此。文。一。そ。ま。つ。り。こ。く。思。は。れ
る。れ。ま。も。し。う。これ。より。は。ゆ。り。これ。秘。こ。し。と。え
よ。この。六。日。と。か。あ。う。と。か。あ。り。こ。も。お。り。ん。所
う。な。終。一。事。た。ら。な。い。よ。あ。ま。し。い。人。と

あーとられてとちうはさうくこの世も侍らす
那もに侍らきて見まはる世の事たあられ
よかぬしくたやえとちうはさうくくはゆるし
とかうかうてらく梅らしてはよしとていふはあ
じうんよ梅ら入りし式うー刀をとりて
しんが事とつらまうりかゝあゝあゝく
くれはげよまこい思結ふらん入をこりて
とちうこれうーあゝあゝありらやれ事とら

一終ふへ終えゆてありえとも時
まじりさうくれを中きあう控てびくまは
おがさりぬさしてあゝいよ涙とえあうれ
は侍中侍のこまひら侍に祢あんらとてを
御り一人のまゝさだりておその結ひくれを
そも侍さくえけ結しとやられを教くま
時よあんちちちちち時よ又とちうかたを
おとといひさうさうさうさうさうさうさう

は女房とらむりよは後とせぬあし結らす
うらむよこはとほくされうり言ははら
取涼ぬれハ大浴乃らうせぬあんぢるよあま
ぬうぬよさうくゆせ結くこせうよあま
と一とらむれあまんとそ車とこ
うむとやうよ神とひんてあま
あま事ハ露は命より命に伝はるりあま
あありあまハ

うらむとそえはわれあは露はあまのあま
とそとらむれ結ひぬえはゆ一あま
つぬよとありはれもそのらハ結一
あま神とこも付つぬよ文とらハあま
しとあひんくそまうとそ女房はあま
てひきありのそあ結一あま結ひ
らとけよとらりあ結一そあ神とあ
てはあ結一あまのああ

きくそくつるよ人のおんかんといふにぬれ
をいよはかりひとて事くすきあつなをいひ
るこれなる道とてとるよつ事あつなをいひ
うにまよひしせとやとぬええとけひつこ
きあういしきくきあはあめてんし時に出は
まぬれせろのちんよほこつれてふまじの
いのかくしとてたうらひのきあうちんとか
みといはんやうんは道せらとれてよるものら
は

これよあつちひこれよあつちふ人とほりぬ
しとてうすもんといふなみあくちんのとて
うらやちん志じとてかつてたうらとてきな
うんは道とてあんとあんしとて事わつた
又のちんといひきよは道とてはとてこ
のこれかてくしとてきよのあつちとて
あんうたあよゆりしとていふよしとて
こつとてすかた道しとてあつちとて

あうくくはうくく一きうたうのうきう
のひうりよよい業ハ志也こよりとあう
せんこくハらんよりとせくぢかあて
むぢい命おらるとやをきあつ刀たはて
う一あてうこひぢ一福うくハあひと
おう一あてれとてこれぢひてかぢあて人
あうぢかりぬき方ほううとあぢ一ぢん
れ時上人あていさあうてあう一あての

とのいよはうぢあてありてあてはうけかて
人あてうけぢうとあてはうぢあてあて
あてい事かあて一あてもあてあてあり
あていよあてあていよあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて

きやうらうとくはまゝなるんときくハ
丁三葉の儀よとてふん秘んをせうとす。
もししてひり余と約しては若域のういふ
てこのやこののまやわうとせうとせうんこ
とせうせうとひりあんとせうつけとゆ
いられを中持う礼とて思ひてせう
まればとてあしとてけつ井てよかいて
うけとせうとせうんととせうのせうせうと

のあひこりやとのいまいられをせう
人とのいせうの事つねの事つねとてい
とよかみとてとてとてとてとてとてと
くといとつけられとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてと
あられよとてとてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてと

その始ひるる所のいよゝめにうしてうと
れとされうりけいしんしんしんしんしん
上人よきまをまつり始ふとて是はつねは
先のかりうん可よとてはれはものま
とけらんせられんぬひとたおぬしと
てしんしん念佛をおこころいひのゆと
おほしきしんしんしんしんしんしん
よはきやうと一とらんはきやうしんしんしん

おほしきしんしんしんしんしんしんしん
くしんしんしんしんしんしんしんしん
おほしきしんしんしんしんしんしんしん
権のしんしんしんしんしんしんしんしん
右中毎らうまされあらんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしんしん
人伏願すしんしんしんしんしんしん
おほしきしんしんしんしんしんしんしん

よしむらさきあひはよきけひのたひまひ
り後換とされの内大臣よりりれおれ
ひまひとれうしていつ月あらんかよ
し合くちうくだれおもひれとせんきせ
る志丹國之後中將乃此文二後よなかり
りれを二後よあくとおれてかをか
よとあへ人へのおれおれとあり
のきやうとあけて内大臣おれよとれ

ゆえにちくくのいまひるる八之位中約り
京よりうひる文由らんきよかたつあひ
事れいんまよけとれはよらるれ
ゆとあひとらんてあよとあひゆ
て内約取成部へ通へ入を給くれとあり
まへ人のあひとあひあひあひ
大臣のいまひるる海にたかひあひ
えぬしあひとあひあひあひあひ

かりよるももろおとらん事もろろしく
くはるに名づく内侍もあつて入まひてん
事もかあひいさしうていさし世とこのい
せ給ふ事ハ内侍可なりはあやみかたりし給ふ
横よいれふりて之後中納一人よあまられ子
ことともきこしきんくしおほし先し
かあやせ給ひあんやとのいさみひ世ハ二後
後又のいさみひりあはれ入さうよとされてはらハ

あんしを命い給てあましことともおとらんこ
ろしきもまじきわくといりとりあはれいせ
しきんあはれいさしこと又あはれいさし世よは
らせらねとあまらるしはあはれいさしきん
まてあはれいさしことありつれ中納一人はまに
ていけらるしよせられ想と字しきんあはれいさ
ましきんあはれいさしはあはれいさしていせきんあ
しとあはれいさしとあはれいさしとあはれいさし

もそいふたしききふしかりしなぬ乃祓と
しけりしあらしとふかふてしちにありた
七月晦系しそ前内大臣のりしれはる院意
乃此うけ文と苑人志志りんのらんれ地さ
ぬうれさるくあまのりてしそまのりなれハ
こういふのありん院まのりて養同と

今月十四日院宣同十四日刻本讃波國卷
島磯流以承取也件就之業之通威以下畜

家數輩於攝津州一公已被誅幸河重漸一
人可悦寬宥之院宣哉我君者受御る余院
少讓而御在位已也箇子雖無御患東夷北
狄結黨成群入洛之間且幼帝母后之御情
殊深且依不淺外舅外戚之志皆雖有遷幸
西國於無還幸舊都者三種之神器爭可被
離也身哉夫臣者以君為心君者以臣為身
君安又臣安君上愁臣下勞臣内不樂音外

世悅安平將軍貞威追討朝敵謀臣傳代々
世々奉守禁闕胡家死間已又大改大信保
元平治而度合戰之時重勅命而輕愚命是
海存為君非為身而不顧力命就中彼賴朝
者父義朝謀叛之時頻可討討之由雖被仰
下故相國祿門以慈悲憐愍餘取申省流罪
也忘昔之不思不顧今勞志忽以流人之身
監連凶流之契愚意之不思也之憾也充招

神兵天罰期廢跡沈滅者猶日月未隨地照
之六也明王若為一人不犯立法以一失猜
不蔽其漚若不忘思食亡父教度之奉公君
早可有御幸西國也然若為始四國九國於
西國之軍心雲集如雨過靡異賊事不可有
疑事于時奉相具主上帝三種神器可奉成
行事之還御若不信會替之恥者人王八十
一代之御宇率浪隨風可零行御新羅高麗

百汝鷄且終可成異國之賊款以冊等執可
允之極可令養安治宗盛頓首謹言

元曆元年二月廿八日 前内大臣宗盛

少元如礼ありらる加りしりれと平家御
系そのことととととい國あとおんか
くくとてととよりらりあんとととと家
告清乃依れり之に依りてととと事

平家御知事

一文書粉失并義仲の家等給事

一 名子細被書載目錄事

一 庄領惣數事

右波一族知り庄領數百箇取之由世間

一 風國而院宮并撰録家庄園或芳恩有之

或所從等致懇懇輩類之如此取之全非

御進止皆是本取在者也仍注入惣數許

也又院御領庄之等進承道乱之乃有限

相傳預取本之等依令慈歎少之返給之
除之或又損亡事非無由給少之沙汰給

一諸國家領事等事

右文之粉失之乃暗不被注付且大概此
中歛

一東國領事

右有御存知之旨被殘幸他國之未補又

山同前也於今者可令領知給銀非平家
知到之地東國御領山田庄以下便宜之
沙領隨令申請可成給少下文於沙手頁

若可令進洲給歛

山前條之御旨也此仍執達也件

三月七日

前大藏卿 奉

前長清作殿

此之給下之札字付

物—とてなひ—とて—見—て—其—き—
—り—あり—九—た—す—つ—な—と—く—ら—ん—地—の—い—
—れ—よ—き—さ—ら—う—き—さ—て—は—ま—た—な—り—と—あり—し
—う—ひ—て—門—を—と—り—知—さ—れ—思—申—將—を—子
—つ—と—と—これ—と—き—あ—げ—て—い—れ—を—り—九—た
—神—の—見—あ—せ—て—は—う—ら—ぬ—ま—い—し—せ—
—あ—い—し—し—れ—さ—う—人—の—と—り—て—申—さ—り—
—と—う—た—よ—う—そ—と—り—と—入—申—さ—り—ハ

あ—り—見—ひ—し—て—礼—と—え—き—給—ひ—さ—り—ら—る—九
—部—の—な—は—ハ—四—へ—し—せ—給—ひ—て—は—さ—り—ら—く
—ぬ—を—給—ひ—て—ま—う—せ—く—あ—れ—と—り—て—は—壺—取
—と—給—よ—け—は—梅—さ—り—ち—お—う—ら—い—し—れ—ら—る—九—た
—ハ—あ—ん—の—ゆ—て—り—と—れ—ら—る—ハ—あ—れ—ら—ら—と—給—ひ—
—し—と—給—ふ—は—余—の—見—ら—ち—は—事—と—り—お—り—と—
—ら—ん—地—の—神—が—し—と—り—ま—い—し—せ—と—給—よ—う—と—給—
—清—地—れ—し—と—り—ら—し—ま—い—し—せ—よ—ら—ん—と—ん—せ

ひこれきいふがこいよはれくらとせ
せんらん女さうりうらて又三十きん
うりうらうは仲より代せられをり
よえよはあやみんわうとから京字にけ
さきさうし先うはらん八百さうり
ぢりありま路くさしむは公の甲うら
ありぢりルくされらるものへは後を
船り目すすかれは二月まじりては

とてよ言ぢむすきんり記をゆれ
電うと見えて浦くすありあ
ゆと橋の事いよ思はれしよ
れをこらなはとん世れさくされう
そそそそとわむとわれしは子れ
一人とみ記事をちけさう六二位友と
少方とわい記事よわい給ひて佛神
よとれしものをあられかえり子れ

ぢりりなるあしきうらひよんくちか
ゆしとせられんお母をそそめてお事と
おがえてあられお母はと二月十日あを
お事なれお事よりのお母のひらぬおね
とおししてこゝろおけおとらるお母
んことおらうともお事なれともあれて
くおしとせられんお母をそそめて
りよぢりりみれお母のこゝろお母をそそめて

お母のありらるお母のこゝろお母を
とらめらんみれお母のこゝろお母を
ハルとせよ物とせおとらるお母をそそめて
お母とせよお母とせ又お母とせお母をそそめて
んことお母のこゝろお母をそそめて
のあしきお母をそそめてお母をそそめて
お母とせよお母とせお母とせお母をそそめて
よぢりりなるお母のこゝろお母をそそめて

流しつりんしてくまうしとありのいとん入
も八南をりて母之けんはめんよあこじり
りこあきれまん海よとつれきこり東谷東
れまふよふるはめんのいこ屋ありから京平
こさ流さちて中おと入らば枚屋れうらよ
しれ流よふとんのいこここここここ
東谷よはむこ流危りれここここ
こ流こり中をうりりの流れここよひん

しし流よいらはかけ時をこここ
ニらんれめんよいありめん人かたとあ
あしうりありて新屋れあやのあれるた
のいこここここここここここ
てああああああああああああああ
流流流流流流流流流流流流流流流流
うけんれひこれここここここここ
これ月こここ流りらとあたるの東れ

うらなれりよとよとられり仲ねとつ
しと備ほりて御久ありて昔傳流のま
ひ言傳の父れらとまの免名れはと
了成傳と免名んと息つらうと平
家とほりけし事あんのうらにな
さうらひの天道とあふまはせ
ゆよらるんさじしをよらりて
とけし一ちやうかえりんさ
らやん

さんよ入母とわらう称南於と
事を大政入道後れ作あへ
のそあはれらうとて
まてこえととのまひ
あましく後と祐よのひ
しとわらうのまひ
家てうむれはま
はらう源氏と
事と

せむくしうらこみてははれぬいふそと
はんと七日くはよらぬあはれいふ
とわくことありし人又らなほあはれな
れものそらありし人といふ心解さくはか
これる歌女九日かあしげは祢りらさ
あてあさうしは湯やひあてて三は仲約
よゆあはせなふんとすありかこはあし
らら仲りくはさうらさくはあていふ

見まひかうせしてあはれあしとら
まいしそあはれいふあはれありは
あはれはなうらやしあはれあはれ
あはれいふさうかこはあはれいふ
目こあせうらあはれありはあはれ
いふあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

物さへいゝからいふはよひるの女もてお母の
やうしてこゝに居居れば治さうくもすれを
申さるうらうれつゝそとののこゝろを
さる程よ目とられよられと控まひる物
そりし程りらゆいりこりさうさう十余人
あり申さるうらうれさるるこゝろよは女
ひさと抱てもさるれを申さるうもはあ
かりとれとらん。さうらうと聞さかく

てゆいりこりられをい女さるこゝろは申
おさうしうけていさけらとよかされ
まじ程と化やもはあかりうらうれんて
トつらんかまてよくとそはまいさお
るうそ我うさじとさ居居ればお母さん
さるはうれうそいあひえととんさ
よひらん程と交はらみさう一勢
してさるんさうさうとさるれを女さる

とこしと記してしうめひて羅綺為重衣
いからうえいとてあふんさうりりれを
とよみゆとそこのりてうらめしん
さうりりり又ちやくさうてらうまの申將
のいまひりれはけれうえいせん人と二日よ
二度まよとんんと山野天神さうらひあふ
よしうけ給るるこしちけひらうあ今志
やういせしられもまよとてあふんては

よりせんけあよぬてはあふ命とがし
なまやういと神さうりりれさいやうあ
いぬへん事あふあよんてあふんとの
まひりれはけ女又さうりりあひて十あふな
まよとよとあふんてあふんてあふんて
いとあふんてあふんてあふんてあふんて
いとあふんてあふんてあふんてあふんて
てあふんてあふんてあふんてあふんて

らなは女孫りて世祿のしるしなりしと
らうたうは女一人こそあつたはなは女を
ひき申さるういふをさうりてしらすとあつた
女をうしを琴とつけられもさうあつり
られハ引さるるを惣夜やう居くかけつ
よさるるよ物あられなり又あまきまをれと
のこまひりれハ女一をなげよ居とらりし
よ白ひをうしとあつりしり申さるしと

と一夫らうさくをせりうらう一は後と云
居るえいそ二三遊せられてのらは世思を
なはハ一はよハさく居すまはれは後と後と
いとそとわれまうといふああうれはれを
うしとわかしこまをゆりかぬ申物を枕
とあしよさはそそらなは女居せんよう
よらりなれ取福はくあけられを女あえ
しあよらりかにさうあつて申物とらんあ

部よ親命と云はれくされぬよは申ね
まにまににおうりておれぬは入るやあはれ
松尾屋と云はれぬ親その大匠と申て
さし國よおえまは旧大匠と云はれぬ
ゆえに申すにさういふあはれぬ
事そへうけ給へすのらぬは必きあはれ
と申すれは若衆依れ給ひらうえいよ
と申す大匠と申すにさういふはらぬ事やえ

ひらきしりまはる昔はまのわが
まは帝徳しりまはる見あはれ女とけうあはれ
られしりまのわがまはるわがまはれ
まはるらよすまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはる

よお月うれきりありあはれき月一日りり
うき勝依れかこころとてあうとらぬ物こ
よ三ちあうれあうれひうなすしれ
こころれう海志路取さひう絵あきあむ
——世く入て格やよあし女童よこ
うせくああまうりて三後仲あ後よ
申あうらん結てさしかくと物ものし
とああハおとさうよ思く物もああせら
れいすしりりれハ依うらりひてえね
——

えんの時げ三後仲あうれりあう三あ勝志
けりきりさう丸とうけりさうと移りけ
三人とあうりてあうり勝志のこらと
うそあえれ國電の浦よるさうとの真と死
わうり初れ浦治あけの原玉勝志相神日
國電のちうくとさうとさうとあうれり

そいふ前も後此様なり是よりありふ
ぬ人をいふて無一人くとも今度
ふむと云わすしもなごまを成りて様と
もよれ人はゆふくは折一本之後中
乃り見ふしやうとられはなまのう
よ我よりはなをぢうとてかひり
ふもひんをいふ様ひられもんか
ひてぢくくかや成りてはひて人

ふら祿られなは三條のいふるんを
りらよらう子よといふてはら
て小松殿よはけのうもんは
ありては様ひるの時かすや
人の養女ありかすは越中治
は治さいあひさくかよひ
は時よるに二世は様と
よこえら先世はとらぬれ

忠志乃らちやうとやれ侍候ふ心は先なり
みめがこちへけうらんふして丁こひまれ
氣が平を祐の母ひまのひんこしとちけ
まをまひめいばえ板よあまけりあはれこ
んめこしくと白りれを玉眼看にもこと
けし入道物足あまらり上落ありしよ
こそあひうし目しまこせなほありし
とれはあまよはしりまこいあはみしり

いんれこちうしめいせいあはれ
のこ契ししちちちりけしとまれ
あてしれくらと先しよせ勢いしと
なほはこちうはしよあまんのこいよ
しとせはのめよあこちと先
やまかりあんせよちれよのおと極こいあ
くれとこしと先しよまこし人の世よ
あまこしとあまあまこしとあまこし

あんなうすかきくーとては戸公おさやうり想
それ時よこ船着れ枕よおとらり立て来よ
よこ雲ひきくく六やとあ鳥けうこれ誇あえ
れおとあ母えなほ愛とだれくとあきう
はあうんのこくくよおれこくしてはてんがれハ
うれくらうあん^ちらとわううてあれいん
ア成訂じしん松ううーら行せうれけ
種のうちあきだしあうう想とらひらは花

物のおいもあよとていふういふなれ時よ
こ苗行れあんやと母くくとあく田よ
アうれ人えとあふ整とあわ我をうめう人
あんあやうれよありなほものことあふよ
いよ更うれー見涙とあさあしとあ久を
ては泣きとてを給と想事とあぢら水
あつよこいやううとあうよのあうああ
あしこもさうれーとらうるあうー事ハこ

なうらひのりありあてありなまはものごとく
と昔れよしとせれこつてうれきこり
ぬまこつとらしんらなももあんと
いとあはれぢく故とやハ我しりぢく思し
ゆれ故とやよむひうはうそくはる信ん
比してうよしそうれきあかうし
そとひひてうらふとや思はれとせこ
てにゆよぢんはと死のうらぬよこそとん

流くわひていしとらてぬ事と
せりあれをよこぬんとそくえうれま
てぬこつらわひとぢくそらこり行はれ
おつよこよせあていよよ及ゆ故ぢりともまこ
せぬゆとひひれもゆくやらこり
ていよと業れ返事とせうりれを女う
ら見て何あよとせむ松よもかうぬ文
ハあるとののられせまてとけよとるゆ小

かゝるふかたを神成ちりりほく由より神
の月六日其事なれを海よりふ神の後ふ
と言ふなりしはさ後れかゝ神のくく
之もまたほくはらんむくくしてしん
なりえよ一當りうんもなよえよ
てはあはる星くくはくくくくくく
ちくくくくくくくくくくくくくく
いと事くくくくくくくくくくくく
と此道あなちくくくくくくくく
思てくくくくくくくくくくくく
しん年十七くくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
いとくくくくくくくくくくくく
つ杯はてみせくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

父はさういふてかうれはありよき見
かかりのこもよきなはんやうを
くそかといふれなはん家と見れば橋の
いそよはほこあげと志んのせりんこりり
うらなはん竹橋守かんのに能くせん一蘭山
かやありらじと思あせられてあられや
ひーの年おとんもく着れん氏さくあ
うれほといふは横どり申さうと涙もじを

ひてものもほこよきす屋久ありていれ
に入道やうはなき君を屋橋よわうせ橋ふ
こいそうげさめらりほらよきうしてうれと
アといわうせ橋ふあやううよらんもあ
えとそそはれハ三橋おのこまひらるわ
あめといふもあらんありしよ人おらんし
よこい國おらわくありつれおもきもんを
あよそしほあつよと見とけしものよ

為事なり一父は法とせたるひてはむらんよき
世なりこころやまかひなりとのいふらんを世
より入道よりなほの老おとろつてふらん母さん
つらくゆりしそくか極よゆりなりて一も世
中れらるゝ事と物と思ひたりて一なり
御くれえいふしゆくはくちやく家れ
近湯とゆも能く心度とて三事とて
大弁のさいきやうよのけりけりともうす針

れてい針とけり一夫は耐うまうおとがやう
おをそく信もぬらうら矢とてい一
三ん針とて入一布衣れとて一ぬ顔
よ海んえなむらやよといてれあはゆら
おとが一くおととてかてておゆえと
それとも弁思入無為ともてい一
戒及族とも思ひて人なりあらんよか海
うりなり一書月日れぬとてい

ひてうれし見下野のいんぶをたぬし一門
はらんをうきさのいんぶの一毒とト
の治大に友の二男とておしりしり
の兼宿をうきさのいんぶを治はう
じうよきハ梅の宿おしりしりしり
れりりいり宿を治はういりりりりり
あつ治とせハけ世は秋のそと霜よ脱よ
ふしとあやう見取れ雲の風よきりりり

ふしとあやう見取れ雲の風よきりりり
あつ治とせハけ世は秋のそと霜よ脱よ
れりりいり宿を治はういりりりりり
じうよきハ梅の宿おしりしりしり
の兼宿をうきさのいんぶを治はう
の治大に友の二男とておしりしり
はらんをうきさのいんぶの一毒とト
ひてうれし見下野のいんぶをたぬし一門

かろきやれんれまの産とそら好道はん
そくれ月くれ一此乃志むけくはれぬを
世に産の秋の風とすはれぬは露とえん
てよまのぬれし又産しはれん人る電
泡のぬれよとめてとや志んわらん命を
國よとてとやうれよとえ老くはれとる
わづれと去ておほれ志ん死のりくはれ
はれぬはそらとれしとまに産しはれぬて

あしあしと三は志ん産んれよとれしとるに二
十ぬれれしとるはれぬはれぬはれぬはれぬ
くれん六志ぬぬいらん志ん産れはれしとるはれ
の産しとるはれしとるはれしとるはれしとるはれ
はれ世を産しはれぬはれぬはれぬはれぬはれぬ
れくれえんそらよとれしとるはれしとるはれしとる
を志しはれぬはれぬはれぬはれぬはれぬはれぬ
うれて海中よとれしとるはれぬはれぬはれぬ

せいさう久の母存家とあられ也仲おをい
れしきくおせうしりしのひて念おし
おししなもはのかいしうよきねおら
よはひ七十を余あるまひりて今ん念
てあり仲おうこしうるそく昨也入
をいしし種てりてしおおんん
あれを充溜りなはし入をう八に明天
沙字六十二と申弟和二年二月廿一日

られ一せん乃事なれはとてよ。三百余歳
よなりはりあやし言は入のら六十お
見七よ万さいと魚ておしあゆ天よらとん
く三せん下ししわし海いしと念
の腕を結おはらみありと申られを
入をうれのらしあゆいとおしあゆせ
人やらんと申おのこしあゆれを充溜
りなもはな延喜の法を結おはらる

れをらんるん信正と申す言はる人の信うらうらよ
まじりておぼえさひらきくしよあまかゝらんを
らんといひせし中言はる言かかゝらることや
てみえう給給るうりはれをえらうことか行しこ
れ後と行うして我をわうとうなうしよりけ
かゝい言しこらんといふおろ言ふおれをよ大
言よの信くえられも(こゝろを)おぬいと信よ
ぢけてしうらるさし言ふし給ひりれを給

心をらんや言らりけしこらまはる言かゝれて
月丸雲圓といふ言をうといひしてしよあれは
ぬいといひしこらりぢくおろもれを給ひよ
りりゆうこれぢくおひてはらよあまらりけ
は信正といひれの後とをえてゆうしとを言
まられを風をらりゆてしよれは家とてゆか
られよらりこえいこもれは家とて言給ま
しをてゆかりといひし言給ひらるゆえしとこれ

はかばかしく一ひひとくも人
を世の時にわたりてわたりて
乃てゆいといふ一ひひとくも
れをえんてせ給ふすも給ひり
とてゆいて一ひひとくも
給ひて給ふよはひとくも
ひよりりそれのら一ひひとく
う一ひひとくも一ひひとくも

ゆれ給ひて給ふよはひとくも
ゆいこれ天皇は後きつはよ
うそあはは家とてをりも
いそはらしく一ひひとくも
とくもゆり給ひて給ふよは
をゆきとありてはらしくも
なはれはしとくも一ひひとく

我昔遇薩埵 親恙傳印明 發無比誓願

後邊地異域

晝夜愍万民

住普賢悲願

肉身證三昧

待慈尊下生

とて中を流ひてはたしうしとて身は出た
いそおつともなる事もやとては末代よ人こ
れとておつともは深きうしとてふんとては千と
しとてはあのはたを家とてあらてあつとて
入とてなめられりてはなほ公家よりとては
くしとてはしとてはあつともは人たつとて

白河院沙時寛法二年正月十六日信下卿

相せんそうも是種くは沙もんきともあつる
とてはけよある人たつとては天ちくもあつる
せし流ひてせのやうにさうはう海しとて
とてはけりともはあつとてはうしとては
やとてはふ一とてはあつとてはあつとては
とてはけられともはあつとてはあつとては
あつとてはあつとてはあつとてはあつとては

中それな事なハそれ人々海にんを知られを
とゆえな事ハそれハそれハそれハそれハそれ
えらすすもそれハそれハそれハそれハそれ
はそれな事なハそれ人々のまはるんと知ら
る中ハそれハそれハそれハそれハそれハそれ
ふハそれハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
それハそれハそれハそれハそれハそれハそれ
それハそれハそれハそれハそれハそれハそれ

くそれな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
みんハそれハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
南の海にんハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
くそれな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ
それな事なハそれハそれハそれハそれハそれ

なまそけいさういよそとせめて金と書候い
さされども治の更もれ時よしえりうとへ
りさし給ひはれさう海よえらくよあはれん
うんよあはれ我朝高麗とよよあはれち所
入らさうしそ海よあはれははれとよと
いさしあまんとそとつとよ日月とそく
龍身れそらあはれよ十万里れ山海と
の兒らんあんとそとて雲霧とよまてまいる

海しととあはれんしそとそらあはれ我
朝の弘法ち所とよよとそんあはれのし神と
あはれあまんとそとこれあはれとそらとそ
首のれあはれ高麗とそ大所とそあはれとそ
涼殿あはれとそあはれ大衆とそあはれとそ
流流とそんのあはれとそとそとそとそ
とそあはれとそとそとそとそとそとそ
とそとそとそとそとそとそとそとそとそ
とそとそとそとそとそとそとそとそとそ

三つよは高澄名我三つれ若くは此様を立
りとしんわのさう三つれ源に神三つりよハ三
時教とそそく一休の若うけうとらん其い
らいる有宣中三つれなり三らん三つれ通性
我三つりゆは二苑とそそく一休の若う教とわ
さじ二苑といふやうとんさうをさういさう是
なり若くは三つれもうわう若くは三つりよハ三教
とそそく一休れ三つり若くは三つりよハ三教と

は小京教始教始教とんけうとんけう是
なり天多い三つりれ高院我三つりゆは此教とそそ
めて一休り三つり若くは三つりよハ三教とそそ
通別名三つれなり其味といふを乳酪と醱醗
酬三つれ也此れ時三つりえ三つりれ弘法我三つりよ
は三つりよ三つり三つりけうとそそく一休り
三つりよ三つり三つり三つり三つり三つり三つり
三つり三つり三つり三つり三つり三つり三つり
三つり三つり三つり三つり三つり三つり三つり

にふふへまをれ時人のせれうくちんえん
のりくちん成佛をよめくうさくひしれ
りりえわのこうちりれ海に増部弘法とな
むしまはれれはよいしうかをえ一紙の
のま文とんるまらぬ三劫成仏乃文のあり
て即身成佛の文なりしりれの文説より
とんせうあふくくされてちかえれくひ

をきうくはるくくしり弘法くくしれ
くまうくちんちちちちけりれ仲よはらぬ
三ちちちち佛乃ちんのとあてりくちん志
やう佛のちちちちちちちちちちちちの
くまうく

若人求佛慧 通達菩提心 父母取生身
即證大覺位
は文とくしめくくしてとんせうくちん志

めで夜をうとそめく金うんとのくて
馬と責給ふれかや沙幸れうあや白
河院かをうよる整とさるよおけいんこ
れや家あやそれ子あは清盛にやあや大
ううさあにさるれななあやさあに
さあにのくく見やれま申るれ
見うけ給ぬとのいさみて下向一給ひ
りらよ通しそこのいさみあはら師乃は入る

を承和二子れ事なれはさあに
海蔵よななあるよれとみすあや七
さのさるん二忍の腕を給給ふらん
し給うなれれりうなれ雲のれあやん
か屋うよるあやあやあやあやあや
うさるに給ふさあにさあにさあに
あやあやあやあやあやあやあやあや
あやあやあやあやあやあやあやあや

くもらんこまのうほのちのほの敵はりのもあ
ふれとふひの想く——とれ日とふれより何
れ入通つあんちらよゆて音今れめだ——
いこふひよちこりゆれ事あつりあり
む——アうりまそん短くまうくちんこれゆ
の上はあん理のむとみう身入我入れまん
れま人はなれれ再あううまんとあひを
こもひとあれ軒窓は風さえてちるうん

こひ身曉のほ夜れ月の光くと涙とまよ
ゆと友とふれほ更うんてうれう祢のまよ
はせ流る福ありとまう流らんとあひあり
のうれ想あくをわけてこあまほくくた
もふれはれまふひあしあけぬまはうん
院智えと人もまは上人とまあう——
て出家せんしとせしれまは三後中ねとこ
あ情い——そう九よのこまひまは我をたせ

てなすのこはくはまはもりて見んくくも
よきとまらして何れも入道よそせくせけ
る石ころ丸れをそそおみ見れもいさ
かよりしうりてなりえれと八もを流さなす
中將の徳やとありたいそらてこく
八十一卒よそなりなすあろくくい
とおしかり接ひられをまけけおしたと
らす思接ひよりりこまらるるんこらて

そらとん接ふよのるても沙海せれお接
く接

流轉三界中 恩愛不能断 弃息入無爲
眞實報恩者と云ふこみへてそらと接ひる
もとあられ水のこみかろ思もこみ今
つ度んてことかこもあつたおふ事あら
しとお母もそ接るぬれ之後中ぬ
と与之苦痛も同年めて女七やいりこら

丸を十八あてにたり言はれ申すおぼへんは
のこまひをば八我ともかくとたりな
ぬくしふ色うも今一度ぢふ事とも
いふ色うもやとおとくとも言ひ申すは
ものともたうと思ふもしてさゆともか
くせしとも色うえん事ゆひんぢふな
いものもこのころいふぢかんと事と
いふもいふおぼへかされある事ういふれも

いふものもきうせしとおぼへんは
さうんとういふ事とほおよじ
ぢいしぬぬいうもりの六はうと
らんともぢんを申すはさうと
らりぢりとのこまひては波とれあ
すぬこれより色うへゆて之はゆ
将ぢともとありのまぢあぢ
らんせらけいぢうよたういふせ
らんせらけいぢうよたういふせ

山東とふよとあるよとて後ろりの旨よ
アそまひり給ひなほりなりあけよれ
ほり給くもてうなうとたもられりな
このかごと雲井と致うよちあけり書子れ
由事思こく一給ひて沙後よじせ給ひあ
アこれと娘の明神とと致りひ人のきうせ
まこれと玉傳とま初らつあけの浦とや
よこの浦よこまやしく日能國懸の古もれ

とりたまはれはのこみそうに浪あはれを
ゆられととりこしなほし中里はる梅のんあ
思あらるまよれはよめてかりとあうそ
はあとの七八兒さつりらつれてあひを
はれまよてよかこれもてかき免それぬ
と思くをのくく一のりよふとつけてあ
いせんう一給ひなる福よし馬よらあ
アそさくわくこまんと致りなれをんか

うなまのよこそをれあしんあさ
見れはていさあやまこ
これ湯沙槍を入道宗重の子湯浅長
勝のひらふものやありらう
とけさかへこれあかほそいあ
れを小松左兵衛の伊子あんのよけ三信申
お慶よ倉一海よりこれあかほよ一
たより流ひなほあちく海よりてけんん

おと入らうこれあかほ一
あまよ思くるとあれはあかほあ
海やとて渡とらう一海よりて
一海よとも目治屋はれを岩田河よか
あり想一濃の氷と氷はけ河とつるれあ
見業ほんあつむあれさああううなるな
はものよこのいさひてあれよ一海
流ひなほあれ日ハ流れあちく海よりてけんん

子よ一夜通夜一終ひて好せし事とて
これを書かば不宣有索めておらむはもう
三つんの儘を待つ終ふしとめてこころれこ
れより心路の入りまふ言天の聲よ多と
ゆる留中天りともおと成るはわりの人
もんとまうらすおとけんまおとかくらり
つれ終ひよらり以候まんなよれ母の教
とまおのちかやよまおそぢれけららの

おと心路の入りまふ言天の聲よ多と
ゆる留中天りともおと成るはわりの人
もんとまうらすおとけんまおとかくらり
つれ終ひよらり以候まんなよれ母の教
とまおのちかやよまおそぢれけららの
おと心路の入りまふ言天の聲よ多と
ゆる留中天りともおと成るはわりの人
もんとまうらすおとけんまおとかくらり
つれ終ひよらり以候まんなよれ母の教
とまおのちかやよまおそぢれけららの

さいふやうとに氣ぬつゝ一息へ一龍滅後
の海よりよはし舟長旅ふより又大匠の命
とありてぬきやうとまをけしせ旅くせ
や旅ひらん事かゆしゝしてさし
れやうとせおとれなほそれ夜を過夜
一旅ひてなせれ事とすれなほ中
よと秋多しとかくなりぬもなほのい
一旅ひあんとにぬき旅ふしうき世旅

いふゆゑに旅のくもとせぬもの六おんあ
いの旅ならりあらとあられよのよはせも
よりなりあをぬれをなほとて新ま
へつゝい雲れよこのいねとふかして旅
心旅ふとせぬをけいの旅よれなほ旅て
神のそとと伏かきとあらまはしと旅ひらん
されつゝりよとせぬとこ一旅ふゆん
くしなちんつゝいよんつゝいよん

世のほうりー縁ひーさおんきわうあわさ
のこそくさんとうれよハ世にーとんて
きりりり中もと也意痛れ脚いまりと
ほいてよ去寛初れしり歌のれほう
皇れとさぢひ縁ひもゆえれりて
うりてろれさうあつとあえ縁ひを庭
れ初る草さうりひとんきんもえて古
ゆー時と得首と忠とも見縁ひは縁

尤もれ縁とえはよりりそれよりり
ももーまじりあつらばいあつら
とりれ縁の中よ歌あてんきりもあつらけ
るこりーありさうさあれ縁よかるとけ
はハあれよおんもばさうあやと平家小
松内大臣後のらやくーあむのよは二縁中
将後よあれよのや縁中將とりー時安
元二年のまれはわう是なりさる敬めて

兼息終々成り此時六十の所望されありし
よ父志をとりて内右将に大將おらじ
祢より中納言志大將おそ階下おち
や見度せしれしるさし中納言みらとり三
後中納言をひらひ下の郷相うんく十
余人ともあやうな心とさくおそい責はく
ろひく垣代女ころれり中より橘梅
を移しけりて廿六の段とまいておそ

れりりーはひきハことハ風よハ氣ハ氣の
にわハは身ハあを風よひるかろ天
よかや氣地とてし治るるをぢりし水
あやうな備れいよれ様よおがゆるりやまあ
三子とあはハ大辰れを將うこひあはし
とそえんまをーよこまこくかんれー
なへーとなかりて思ひこりー事かれ
うつれまかほる世れあひらひあし心さ

心のありき海がれとて神を母よおし
あてしづれを心あるか人のそうつとを哀れ
神を母よおしをばけそうつとて越中のせ
じしゆのわさうし。叔父兄弟よそありけ
れまいとけあれより人をもかくひらるよ
やそえとこのうんき、事ゆへなくさけら
れよづれをこもれあんなまのま子は沙
まくよるしえりれあよる海うして万里

のわさえりうりしづれをばけそうつとてあれ
しづれをこもれあんなまのま子は沙
まくよるしえりれあよる海うして万里
あれよあて大なる松とあつり中ねのみ
せれとて去けし家平家大政入道信長ほう
あまやうくあひ孫小松内大臣たぢね志
まをわさよあちやうしえんのとけえ信仲
あれより生色廿七さかあつあんのさみ
よるあまこれ國屋海とまをまねゆつてん

物うこもれうんそく思のこいあはく
まもちいあふとちくうかこいしと
のうれしうけりかこいおとけあひ
龍顔よ咫天志く春れ夜と見てあは
いあひを舊院よ夙夜志く秋月とあ
見あひをりし此園の波ようけ祢
しそかろろの志よ夏と残しあひを
鴻のあまれいさのやまかこい志は神よ月とあ

うみし事まくと思こいさよとふ
事なりし標うれをばふ事まもう志うれ
つこちれよこも思かあてあこいあ
方よこい念佛やこもふ中あといふよ
あひまもこいたりといふれうあひま
風れたらりのこいあはくとあはくとあ
らんよはれよかあれあはこいあはけせよ
あはれよのあていさうりあはこいあは

思はくもほしくもるきり 祈ん佛とやめて
かりきやうしていふりよむてのいよ
ひよほにあられ人のあはれいよ
とちもりかかひもほのれけせえ
物よあのはよほのこよあはれほ生りい
さゆいよもりりは事れにさよ志
そく一人もとあはれとあはれほのいら
とそくとりやほかたりつそくいよ

度見しみえりやほほえんいほい
てありかともあはれほ仲おれ事人れ
う人あはれほのす我えと息念いそか
横よあはれしめんう人を更よまう祈んあ
るあしよあはれほあはれしよあまきり
きやうてんのほりまよあはれしほりしほ
とあしよきりなあはれほ事と中あはれ
あはれいしほいあはれほあはれほい

いふの氣はこれなりしとてこれ終しとて
とてみてとらるるれ方角んと免るし
てありむと書とありありありありとれ
とていふいふうらやと世のまよひとていふを
を我子れとていふおほしとていふらとていふ
とれ物とていふ此れとて免入むとて終よ
人の身は書子とていふものいふとていふ
よりいふいふとていふ免とていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふ

うとていふとていふとていふとていふとていふ
佛とていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふ
源氏のせんえ輝与入道教義十二年のる
人のくいとていふとていふとていふとていふ
との江海のうらやとていふとていふとていふ
見とていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふ

とにらん事ある三十三天よひつ成ると
お家の見せしよはあよひつと成ると
成るとは一子お家とれと七世父母皆成
ととととととととととととととととと
めつととととととととととととととと
一軒我ん心健なるはととととととと
あはさい業あつととととととととと
へゆりり始はつとととととととととと

阿弥陀佛来ておとすけ見無之悪執心
執りおとすけ見無之悪執心
て一くれせいせん者よけのせんあつ
とらあつとらあつとらあつとらあつ
我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至
十念若不生者不取正覺とらあつとらあつ
十念たのしあり小阿弥陀は成佛以來
於今十劫ととととととととととととと

人の心もさうれもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
もはと見しと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
しめくしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
三人ともよめくしと見みしと見みしと見みしと見みしと
しと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
靈出離し死生し極楽と恋うしと見みしと見みしと見みしと
えあられあれさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
物見て海はれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

と見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
何と見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
れれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ
初と見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
つと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
いしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
海と見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと
海と見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと見みしと

うらうらうついでにうらうとくまは一度見りや
まはとくあくふれいてさうりーかまか
あうゆくとばりりーかかくあん海のま
なりぬ海の中さうりーこれ想されりとも
かくあ想れいふよたなるさかく思ひま
じとらうさうさうさかくかきさうさうさ
いこかくさうさうさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうさうさうさ

なりぬ海の中さうりーこれ想されりとも
かくあ想れいふよたなるさかく思ひま
じとらうさうさうさうさうさうさうさ
いこかくさうさうさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうさうさうさ
とあくさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさ
それを見さうさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうさうさ
三月廿八日加賀より若狭に頼朝以後正下
終ふりさうさうさうさうさうさ

ういづりし事なめえとくくううは(は)な
わさづらぬれ藤れ元よとの舟はよいて
うんとくううはくはうけとわのううめと
やううし時をさなはいさりきた大仕事一
向みんちよしそいあをせーのこのま
ひはれをし祢まよいなうかーこまて
やうはいあうれとん登ーれと人の身と命
ううりうしまのやん又あまのううれと

と申なまかてかといそやゆぬれはしそ
やうう成初りーとよはくすき藤依も命を
いあられまよいあてぬーのういよかたなさい
ういとくあさひせうれー何とぬあまはせ
いのにはせめて志れ原まうとあまのうていさ
やの事れとあまのうれととうを始とてはゆ
ことよ梅りわてうしういあてひうをゆ
うあうようせうれいんとんとあはうんとと

昔清依けんまじし終ふまゝのむねまよ
ハ沙とともさくとりとめつねやれりれ
け程あひことし海事あるそりて
こまひりれとよほひれけの思ひて
くよあふ事とんれとち成るるよ
音し祢流うりておしよ事よ物れてあ
りかしくありゆ事忘かしくおれん
急し見りつとれんくして一定清也

とよまのつらんせんとんをとけぬ
とくらと見もい思ものれとそ海光や
くよあひちけあそのこまひる事可念とん
として下文あまこちまうけてしよ
引出物とあまこちとそ海へれ大と
ゆよまのつ物と下の物とついで
なまよくつとつりれと下をいし事
あそありなまよ六月大池大船と開東よる

海と接ふ昔清秋と云ふ見とかくておん
せりとのこまひりれとも故もも相傳り
りりくおのりんとその海を接ひるれれ
大綱をみぢりか海をくれり院一戸
これそりな海をくると知接ひる海を蘭松
嶺一町とさういふ海をくれり一戸文と
も接ふけし和文か八ヶ和うト文かれりく
も海をくると見しまは二十是と云ふ馬三

是長とら二十と云ふ羽こつりおのりをさ
ぬていの物入と云ふ海を昔清秋と云ふ
とそりしと云ふれれれ大島小島我とく
そひと云ふ物な海をしまと云ふと二百是り
およ海り命い接ふのそよあつてつれ
てえ海と云ふれ海を

十八日海賀海勢南園無人能得与貞能
りあよ一平回入道貞純法師と大志知う

らんうして世に國へ入りかゝりておのれん
といふことさういふくも國に人ホ一人と
のうらほさんくようらおとさうは平家ら
う代さうてんの家人られ肯れしうと
しとれぬ事ハあられあれとも思えしとお
ほほあられせめての思れあまらやとい
わゆれよ平氏とはけ事といふや
七月廿一日のとき二後中ねれおの

つう風もあまられとてとゆえん
て久たりよれをぢようと事やん
とゆれしもまもる夏といけぬ三後中
おはぬのはな一もたをがなぬとといふ
人ありとゆれぬれをぢよとたりゆれよ
ななうとあなぬ一見おほえて心見かぬ
し見おとれらぬあまらよ海鳥一人と
なりぬれしうられとも思れしうゆれ

秋もどなりぬ八月中旬よかのつかい御来
いよは水返事いと為給へし去二月十五日よ
屋鶴とてかう御入まうてくゆうおれし
て今もれ一つこころに終らぬがきあてめ
とみけ給ひてまうとゆふことしこりな
こ福つこきまうかこりしとゆふられぬ
おのこはれとそあやかりはらとの
とこころのこまひてしあかりまては
ん

此のまふ初る君姫君とこ恋くよか
ら給へし初る君のゆえれとかりは
ぢくくしなまははは事いまうか
おれしめさふこたわら目ら思ま
きりはるは事しかりか之後中將殿の
屋うよんれなうそれを給ひて給へ
らあれさなよかりてゆふことし
ひらしはらりらかれらなかりや

てはあはの氏もあはれおぼしめし
もかしこをわたりひてさうりともさひらばと
たうん山ゆきゆきえこれまれなほ女房¹
ハ女院二位後とさうり先をえこしはひて
さうりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
る福よおみ目よとたりたりとゆりゆり
といへしとさうり福をえぬりゆりゆり
とお母ともせめてれ事あやとあはれり

あはれとさうりゆりゆりゆりゆりゆり
てはれぬぬゆりゆりゆりゆりゆりゆり
とさうりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ておおとさうりゆりゆりゆりゆりゆり
の穴をかしこゆりゆりゆりゆりゆり
れちハゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
さうりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

とあきてと言ふてと伏するてお城がひ
ゆるは人くいふはのりれ事とも思つるね
ゆるあつんとあはれ也

廿八日あは新帝沙即後あり大正令人の廳よ
まゝにけりりせられ祢と大政令人の廳よ
てととこぢえれもは存三條院沙とく浪
曆四年七月のまゝとせり安一と心一は
うけんとぢりてゆりくわある事神武天

皇よりこのまゝ八十二代えれそと一ぬれ
毎八月六日九部より一つぬ一袋れからまんの
きんちあうよお清の耐あはうは即使のせん
一とぢりりりて九良判友とととと

十六日屋橋あは秋とまよぢりりよらりと衣
よあぢえてさわけは月とぢりりあんとあ
のしあはうはならんとあはうれてんとあ
一とあはうとてはああ一とあはう

九月十八日九良判友八公位尉由叙して大
吏判友として侍る所は如梅丸由曹司にあり
しころもれもよなり侍

同廿二日みづしのかき平家ついでにあり
こい國へよりかきとありてふともかき

足利義人義兼 少保良時政
武田吉清有義 侍大将由は
子兼久經胤 同弥境平次純秀

長野三郎重清 備元三郎重成

同弟半替良守朝 笠井三郎重清

小山四郎朝政 同七郎朝光

中派八郎宗政 宗政文良武志知家

子息太郎朝定 依之木三良笠總

比企藤内朝宗 同友四郎能貞

大多和次良義成 安西三郎秋益

同小次良秋原 公藤一膳資經

同三郎秋義

宇依彦三郎助義

天野友内遠原

大野太郎實秀

小栗十郎重成

井依小次郎朝正

浅沼方良廣總

安田三郎義兼

同小太郎

大河平太郎廣行

同三郎廣政

中條友次家長

一法房昌寛

土依房昌俊

小野禪師太郎道徳

等とて一先うして三万余騎の軍兵數
 子被じらうらつていそに屋嶋一とせんよ
 せとを國もやとていてじらうの地を托
 女成め一あり先てありいさく少れて九月
 日成をくりやふされを國とわすれや一氏
 とらつらつたりぬれ事とせぬ東國は太
 名小名ともおほくありつれとと大志あり
 せんの下知よとていふ事なれと一人とてく

ありとも力およし平家八三ぬきれん
またありあしせんやうんさうらそりせり
さよれこり登ひこのちかき都と大さう
らんさうして一万余艘あて海花園少島よ
つれさうりたり源氏れ大さう軍みこしれち
とじらちの流流さうりな海つ松より上て海あ
海中も園れさういある河智河さうりからせ
れ和さうりさふちよおしよせらんさう海

かの和さうり海れさうりて比よりちくく
く大町さうりさうりさうり流れさうりさうり平
家さうり方より海れれさうりはひさうりて
りてゆいてさうりならんいさうりさうり松と
ハ流流よひれつさうりめりりれを比のさうり
和さうり流流れ様とさうりさひからる家れん
しめさうりして源氏れらんひさうりおんさうり
れとも力およし平家れさうり源氏れ

高し初こせやくいそま祢流言は九月廿日
夜もいそりいそ本にえりりつれこま
うらせくかの浦ののさかいらひて
うりりは白くわそとそせてこれ初より
あそこハぢ流のありはまいよそこま
らハこれちる居候とてとくく
くれハ浦人言はは初よりハ敷を二ト
かり月かりらよは東をなかりトこれと

と大根河とちと月れ未あなけハ敷よ
かりトこれとハ敷戸のりりりりりりり
あせよかりてトれ東西二ハ敷の向ひいと
とと中二町とちりトせれとちり二とん
ちのりりせれうらじよはあしとちと
ろ二ととんよはよとせれりりりりりりり
とそハとれあそちとせハいそりりりりり
とそひりれちあき流初ハ流のこちちうた

くまのこゝろにけりしれをさるるハ瀬を
てんせよといひてかの浦人とてえんも
てしと和らりなむはひまよふ所あり
うよきものありしひもえんもさるる
とありしれとこゝろをかんたぬしと
家中二つんもりせありなむはひこれ
より海のしゝあさくともせめて海はな
わくらぬ廿六日ころのうよき家又あり

と何ぞして和らむとてし海はなむ
まうけさるる事なれしれと本さるる
れとれ家せしれひとれよとあり
れよらりよらりいよあそ業ありなむ
うあうあひうしてこよ廿七日あり
ぬれとけんとてやうしりみるれ
ひの海とれとていよあそ業ありなむ
やうやあるといふしとありつれ

よとち入とてさうさうの ちのちのちのち
あ帯はうーくつちよまよまよとちありま
まれおよくおとありあうくちれを源氏
のらんひやうこれとて我とくさうさけ
ア他々本之良下がさ此のまよよ和さの
さてもあふ上野國住人ハられハ良と
平家らうさうさ此のまよれ住人かくの
源次とらんさうかくの源次らうさうやら

のハ良とてさうさうのちのちのち
ひよらりやうさうさよまよのまよ
そらとらふものかくの源次よらんさうさう
こちさう二人海へさうと入さうさう小林
らうさうよさ回源をさう海へ入ぬ源氏
て入ぬ源氏をさうさうさうさうさう
らくてあはのまよとさうさうさうさう
ここのさうさうさうさうさうさうさう

をわさねるありきうハかこねるうーし
つゝつねよりきうとハねよてくさねん
をねのせういよかーあてくひとふ切り
平家なれとてそふと行ひしそ
りり源氏ハ少子なるれをねてとねよと
そよいれともせう物とるつと源力およそ
りねらんつと海軍の首よりとせよと大海
とやいす事なりつと海軍はねよとねと

つづれうんとして源軍はねとてあある
時よねてハゆーしきいふえよえとありき
十月又冬よと打ちねん海軍ハくつ風
とらけーしきいふすねとあつねハあ
つゝはそものせえあは事とけしそ
のねよとまねと天とくねくとをい
ううら時ゆつと日とねとねとつ入心
しねひはれと新中絶えとてりか

七福一福の巻

復れ志願のこゝろを神は改唐いそれ松風
女三日都女はくの一の祈幸あり曰其よりま
れん月と今年とせう為給ひまは節り大
好漣大寺大石実気のとれ時口大石れ
れ大侍よりくおとせしはる免給ひりり
去く年れえ音れはくの一の祈幸あは平
家口大石じひのりれ節りれおとせし

節りれ怪と急て氣もあつのこゝろまらぬ
給ひりありさ梅ありとまらぬひれ給ひ
しとのどかりきハ神の祈り表袴のせえ
ちとととたととれととと給ひあはのほり
一門の人く三信仲おしりれ追情依のせ
縄あつれしあは又三信お梅人おしりれ
九良お史判友よりつねととれ日は本陣
あはれとととらきお曾やととありさ梅よ

ハとらうしとにせとせられぬよ京に於てをん
えんもなれども平家の中よえんひせら
れ一人くよとよとおよと信成氏を
よがしりてえんをな

十一月十八日よ六太をうとせとこあはる去
浪成氏よりこのこ徳園七道人氏百
姓も平家のにぬよちやゆえれ源氏れぬ
免よほり得えれてしありとせとこ

まししりぬをと東光氏とせしれ秋
ハるぬのいよあこあをれよと信公家れら
ま物ととなしとせしとらか感うれ大礼
とはぬこなとせしとせれと意えしと
ありぬ事なしとせしとせしとせしと
あられらぬ

十二月廿日信成をハるぬとせしとせしと
國よ屋とせしとせしとせしとせしと

善よりり平家於とわらてゐ海能浪よ
たよひ終くとと死しとていしとてすこ
う國少もを志りしりあれとと都のふた
國の臣民もせひあゆとひもあゆとりあひん
たれそよよそ昔情依より院一りあれ
物云

一朝務以下除目等事

右守先規殊可敬德政但徳國更領等尤
可有計御沙汰比歛東國北國比各道國
く追討謀致軍之間也元土民自今者浪
人等海能舊里可令安堵作死者來秋之
時被仰國司被行吏務者可直進

一平家追討事

右幾内追國号源氏携弓箭軍任人等早
仁義經之下知可引率之由可被作下進
海能難不仁意殊可急追討之由可被作

付義徑作也於勳功賞若其後賴胡可計
申上作

一 諸社事

我朝若神國也社古之神頗無相遠其亦
今度初各可被新加欵就中去比麻島大
明神御上落之由風國出來之後賊徒追
討神戮不空者欵兼又若有社社破壞顛
倒之事者隨功之程可被旨付更領之功

作其後可被裁許作

一 恒例神事

守式目無懈怠可勤行之由可尋沙汰作

一 佛寺事

諸山御領也舊恒例勤不可退轉也此寺
者僧家皆存武勇忘佛法之間行德不同
先用樞作尤可被禁制作欵於自今以後
者為賴胡沙汰於僧家之武具者似法奪

取可与依道討胡敵之官兵等之由不思

依道也

以前條之言上七件

こるわんれよりなほ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



